２歳児

自分で　じぶんで　やりたいな

１　発達の特徴

・歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能や、指先の機能が発達する。それに伴い食事や衣類の着脱など身の回りのことを自分でしようとする。 排泄の自立のための身体的機能も整ってくる。
・発声が明瞭になり、語彙も著しく増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるようになる。
・行動範囲が広がり探索活動が盛んになる中、自我の育ちの表れとして、強く自己主張する姿が見られる。
・盛んに模倣し、物事の間の共通性を見出すことができるようになるとともに、象徴機能の発達により、大人と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しむようになる。

【基本的な運動機能】

この時期、子どもは歩いたり、走ったり、跳んだりなどの基本的な運動機能が伸び、自分の体を思うように動かすことができるようになります。喜びに満ちた表情で戸外を走り回るだけでなく、ボールを蹴ったり投げたり、もぐったり、段ボールなどの中に入るなど、様々な姿勢をとりながら、体を使った遊びを繰り返し行います。その動きを十分に楽しみながら人や物との関わりを広げ、行動範囲を拡大させていきます。

また、紙をちぎったり、破いたり、貼ったり、なぐり描きをしたりするようになるなど遊びが広がり、探索意欲が増し、自分がしたいことに集中するようになります。指先の機能の発達によってできることが増え、食事や衣服の着脱、排泄など、自分の身の回りのことを自分でしようとする意欲が出てきます。

【言葉を使うことの喜び】

２歳の終わり頃には、自分のしたいこと、して欲しいことを言葉で表出するようになってきます。また、遊具などを実物に見立てたり、「・・・のつもり」になったりして「・・・のふり」を楽しみ、ままごとなどの簡単なごっこ遊びをするようになります。

こうした遊びを繰り返し楽しみ、イメージを膨らませることにより象徴機能が発達し、盛んに言葉を使うようになります。また、遊びの中で言葉を使うことや言葉を交わすことの喜びを感じていきます。イメージが自由に行き交うことのおもしろさ、楽しさを味わいながら、身近な保育者や子どもとのやり取りが増えていきます。

【自己主張】

生活や遊びの中で、自分のことを自分でしようとする意欲が高まっていくことや、自分の意思や欲求を言葉で表そうとすることなどにより、子どもの自我が育ちます。そして、「自分で」、「いや」と強く自己主張することも多くなり、思い通りにいかないと、泣いたり、かんしゃくを起こしたりする場面も表れます。

個人差はありますが、保育者がこうした自我の育ちを積極的に受け止めることにより、子どもは自分への自信をもつようになります。一方で、自分の行動のすべてが受け入れられる訳ではないことに徐々に気付いていきます。子どもは、自分のことを信じ、見守ってくれる保育者の存在によって、時間をかけて自分の感情を鎮め、気持ちを立て直していきます。

2　教育・保育の重点

- □ 安心できる保育者との関係の下で、食事、排泄などの簡単な身の回りのことを自分でしようとする気持ちを育む。
- □ 保育者を仲立ちとして、友達と同じ場で遊んだり言葉のやり取りを楽しんだりする。
- □ 身近な人やものに好奇心をもって関わり、発見を楽しんだり、試行錯誤してみようとしたりする気持ちを育む。
- □ 園庭や園外への散歩で出会う様々な生き物について、見たり、触れたり、保育者から話を聞いたりして、興味や関心を広げる。
- □ 興味のあることや経験したことなどを生活や遊びの中で、自分なりに表現できるようにする。

3　親育ち・子育ち支援　保護者へ発信しましょう・・・子育て支援と家庭の教育力向上に向けて

☆ **人間の集中力や意欲の基礎は、自発的に求めて活動したものの中から大きく育っていきます。「できる」「できない」で評価するのではなく、子どもが「自分が」「自分で」やりたがるという気持ちを受け止めることの重要性を伝えましょう。**

- この時期は自我が育ってくるとともに、自分でできることも増えてきます。
- 「ボタンがはめられるようになる」「ズボンがはけるようになる」「友達に玩具を貸してあげられる」など、「できた」が最終の評価となり、到達度のみに目が向くことは子どもの育ちによい影響を及ぼさないことを伝えましょう。
- 「ちゃんとできる」ではなく、子どもの「自分でやってみたい」という気持ちを、大切に受け止めた育児を進めていけるようにしましょう。

☆ **自我が育ってくる大切な時期であることを伝えましょう。**

- 自分のことを自分でしようとする意欲が高まっていくことや、自分の意思や欲求を言葉で表そうとすることなどにより、子どもの自我が育ってきます。
- 「自分で」「いや」と強く自己主張することも多くなり、思い通りにいかないと泣いたりかんしゃくを起こしたりする場面も表れます。焦らず、ゆとりをもってゆっくり丁寧に関わっていくことが大切です。
- 個人差はありますが、大人がこうした自我の育ちを積極的に受け止めることにより、子どもは自分に自信をもつようになります。大人にとって育てやすい子育てを考えるのではなく、子どもにとって自信につながる子育てが大切です。

☆ **一人一人を大切に、やりたいことを好きなだけ十分にさせ、何でも早く早くとせきたてず、子どもの気持ちを大切に受け止めて関わっていく大切さを伝えましょう。**

- 自分の行動すべてが、受け入れられるわけではないことに徐々に気付いていきます。子どもは、自分のことを信じ、見守ってくれる大人の存在によって、時間をかけて自分の感情を鎮め、自分で気持ちを立て直していきます。

4　発達に必要な経験の内容

健　康

○　手洗いやうがいを保育者と一緒にしようとする。
○　靴を一人で脱ぎ、徐々に一人で履いてみようとする。
○　保育者に手伝ってもらいながら、簡単な衣服の着脱をする。
○　片手で食器を押さえスプーン・フォークを使って食べ、嫌いなものでも少しずつ食べるようになる。終わりまで一人で食べようとする。
○　運動機能が高まり、全身や手、指の動作が発達し、走る、跳ぶ、蹴る、ぶら下がることなどをして遊ぶ。

自分で靴を履く。

保育者の関わりのポイント

★　生活リズムが安定し、身の回りのことが少しずつ自立してくる時期である反面、感情が分化し複雑になってくる。自我意識が芽生え、不安定にもなりやすい時期であり、寝る前は興奮させず、食事などは楽しい雰囲気を心がける。また、日常生活の各場面で保育者は感情的にならず、忍耐強く、楽しく保育を進めていくようにする。
★　衣服の着脱は、自分でしようとする気持ちを尊重するとともに、手伝ってほしいという気持ちにも配慮する。ボタンのはめはずしやヒモ通しなど、指先の発達を促し、衣服の着脱につながる遊びを取り入れていく。
★　トイレは一人で行ける子どもでも必ず保育者が付き添い、紙の切り方、拭き方、水を流すこと、手洗いなどを丁寧に言葉や手をかけながら教えるようにする。自分の場所や自分のものがはっきりと分かるようにして、自分でしようとする気持ちを高める。
★　食事は個人差が大きく、また、その日の体調や気分によっても異なる。その時々の子どもの様子を把握して、無理のないように進めていく。
★　歩いたり、走ったり、よじ登ったり、飛び降りたりなど様々な運動遊びを経験することで、基本的な運動機能が伸びる時でもある。しかし、自分の行動を加減する力はないので、事故のないよう十分な注意が必要である。

人間関係

○　保育者や友達とものやり取りや買い物ごっこなど簡単なごっこ遊びをする。
○　平行遊びが多いが、気の合った友達と短い時間一緒に遊ぶ。
○　他の子どものことが何でも気になり、真似をしたり、一緒にふざけたりする。
○　自己主張が強く、なだめても叱っても、強引に自分を通そうとする。
○　見立て遊びやつもり遊びが十分できるようになり、友達と関わり合って遊ぶ。
○　保育者の真似をしようとする。

保育者の関わりのポイント

●　気に入らないことを言われると「イヤ」と否定したり、自分のやりたいことをしっかりと主張したりする。時には噛みついたり、叩いたりするなど、人との関係の中で思いがぶつかり合うことが増えてくる。簡単に解決を急いだり、不安定な気持ちを長引かせたりしないように、情緒の揺れ動く時期の子どもの心を保育者がきちんと受け止めるようにする。
●　好奇心や反抗心が強くなるが、甘えたい気持ちも強く表す。この甘えたい、依存したい気持ちを十分受け止め、安心できる保育者との関係に支えられることで、自発性や我慢しようとする気持ちが育つようにしていく。
●　知的好奇心が強くなり、保育者の行動や年長の子どもに関心を示すようになる。一人一人が十分満足して遊べるように環境を整えたり、保育者も一緒に遊びを楽しんだりしていく。

環　境

○　生活用品、ままごと道具、人形などを使って、家庭の生活などを模倣して遊ぶ。
○　積み木やブロックで作ったものを道路や乗り物に見立てて遊ぶ。
○　身近な動植物を実際に見たり、触ったりすることを通して、それらに親しみや興味をもつ。
○　「自分の場所」「自分のもの」という、所有の意識が明確になってくる。
○　粘土、紙、布など様々な素材に触れて遊ぶ。
○　ごく簡単な分類ができ、玩具の区分された棚などが分かり、自分で出し入れをする。
○　クレヨンなどを手にして、思いのままになぐり描きをして遊ぶ。
○　パズルや絵合わせなどに興味をもって遊ぶ。

保育者の関わりのポイント

▲　この時期は、ものを思い浮かべることができ、見たものを真似る遊びを喜ぶようになる。保育者は、子どもが思い浮かべたイメージに合わせて応答的に関わり、イメージの中で遊ぶ経験を大切にしていく。
▲　外遊びや散歩などの際に身近な動物や植物を見たり触れたりする機会を大切にし、子どもなりに探索や模倣を繰り返す中で、周囲のことに対して好奇心がもてるようにする。保育者自身が生命に対する畏敬の念をもち、身近にいる様々なものの生きる姿を尊敬する姿勢を示す。
▲　「自分のもの」で安心して遊び込める「場所がある」という感覚をもつことができる環境を工夫する。
▲　玩具や人形、ブロックなどの置き場所を決め、子どもが自分で出して遊んだり、区分して片付けたりしやすいように環境を整える。
▲　遊びの中で興味をもって質問してきたことは丁寧に応えるようする。

言　葉

○　日常生活に必要な簡単な言葉を理解し、自分の思いや要求を言葉や態度で伝えようとする。
○　ものに名前があることが分かり、「なーに？」を連発する。また、絵本を見て、聞いたり聞かれたりすることを喜んだり、知っているものの名前をさして喜んだりする。
○　友達と一緒に紙芝居を見たり、簡単な言葉を繰り返したり、ごっこ遊びをしたりする中で、保育者を仲立ちとして友達との言葉のやり取りを楽しむ。

「おんなじ　おんなじ」
友達との触れ合いを楽しむ。

保育者の関わりのポイント

◆　周囲で起こる様々なことに関心をもち、それらを真似したり言葉で表現したりするようになる。保育者は子どもの伝えたい気持ちを感じ取って言葉にしたり、状況を見ながら言葉をかけたりするなど、ゆったりとやり取りし、会話の楽しさを知らせていく。
◆　言葉の発達は個人差がある。楽しく遊ぶ中で、ゆっくり聞いたり、共感したりすることで、話したくなる気持ちを育てていくようする。
◆　一緒に遊びながらものと言葉、行動と言葉を結び付けて知らせ、気付くようにしていく。
◆　好きな絵本や歌、手遊びなどを保育者とともにたっぷりと楽しむ経験を重ね、子どもの言葉や表現を豊かにしていく。
◆　子どもの言葉や表現が増してくると、保育者を見て何でも吸収しようとするようになる。保育者は常に正しい言葉、正しい振る舞いを心がけることが大切である。悪い言葉や、汚い言葉を面白がって使う時は、周りに不快な思いをさせていることをその都度伝えていく。

表　現

○　水、砂、土、紙、粘土など、様々な素材に触れて、全身でその感触を楽しむ。
○　保育者や友達と一緒に歌ったり、楽器を鳴らして遊んだり、手遊びやリズム遊び、体操を楽しんだりする。
○　生活の中の様々な音、形、色、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感動したり、伝え合ったりする。
○　生活や遊びの中で得た情報や印象に残った出来事などから、イメージする力が豊かになっていく。
○　興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する。

ダンゴムシを見つけ
丸くなる姿をじっと見つめる。

保育者の関わりのポイント

■　リズムに合わせて体を動かす中で、一体感や充実感、安心感や穏やかで優しい気持ちなどを味わい、自分の思いや体の動きと音楽やリズムとのつながりを、心から楽しむ経験を重ねられるようにする。
■　生活や遊びで体の感覚を伴う体験を積み重ねる中で、不思議さ、面白さに気付き、更に興味を膨らませられるようにする。
■　一人一人の子どもの現在の興味、関心を理解して環境を構成することで、子どもが、自分が経験した事物をてがかりに、様々なイメージを膨らませられるようにする。
■　子どもの表現する世界を一緒に楽しみながら、そのイメージを広げるような関わりをすることで、更にその表現が豊かになっていくように援助する。
■　保育者が仲立ちすることで子ども同士の世界をつなげ、ごっこ遊びなど、友達とイメージを共有した遊びへと発展させていく。

５　実践事例（10）

２歳の頃

おんなじ　おんなじ　楽しいね

友達と同じ場で自分の遊びを楽しむ

ままごとや人形をおんぶして遊ぶことを喜び、友達と同じように遊びたいＫちゃん。エプロンや三角巾を着け、人形を箱のベッドに寝かし遊び始める。保育者がベッドを用意していると「お布団は？」とＫちゃんが人形を持ってくる。「Ｌちゃんちに赤ちゃんのベッドもお布団もあるよ」と声をかけるとにっこり笑ってＬちゃんのそばに行き同じようにベッドに人形を寝かし付け、布団をかけ「ねんね」と隣で自分にも布団をかけ添い寝をする。

★健康　●人間関係　▲環境　◆言葉　■表現

◆自分のやりたいことや思いを保育者に言葉で伝える。

●友達と同じ場にいることを喜ぶ。

■身近に経験したイメージを言葉や動きで表現することを楽しむ。

■お母さんになったつもりで自分なりにイメージを表現して楽しむ。

★自分のやりたい遊びに没頭できる楽しさを感じる。

●保育者に自分の要求が伝わってうれしい。

☞ 保育者の関わりのポイント

☆ **表現する楽しさや他者に伝わる楽しさの体験を積み重ねる中で、表現への意欲や人と関わる力の基礎が培われていく。保育者は、子どもの発達を捉え、動きや思いを敏感に受け止めた環境設定の工夫や援助を心がける。**

- 日常生活に必要な簡単な言葉を理解し、自分の思いや要求を言葉や態度で伝えようとする姿が顕著に見られるようになってきたＫちゃん。
- 今日もエプロンを着け、楽しそうに憧れのお母さんになりきって表現している。
- 保育者が「ベッド」や「布団」など日常使っている物を提示し、言葉や動きを添えて表現したことでお母さんのイメージが更に膨らんだ。Ｋちゃんにとって同じ場にいたＬちゃんが同じような動きをして関わってくれたことも心の弾みになっている。
- 日常生活で見慣れているエプロンやハンカチ、布団、ベッドなど、ごっこ遊びがしやすい遊具があったことが遊びのきっかけになっている。

5　実践事例（11）

２歳６か月の頃

「どーぞ」「どうも」楽しいね

保育者と言葉でやりとりする楽しさ

砂場で保育者のそばで皿に砂を入れごちそう作りをするＭちゃん。保育者に「どうぞ」と皿を持ってきて「どうぞ」「どうも」「おいしいね」「ごちそうさま」と言葉のやり取りを楽しむ。そのやり取りを見てそばにいたＮちゃんが保育者に「食べたいな」とつぶやく。保育者がＭちゃんに「Ｎちゃんも食べたいんだって」と声をかけると、皿に砂を入れごちそうを作り「どうぞ」とＮちゃんに渡す。「どうも」とごちそうを手にＮちゃんはにっこりする。

★健康　●人間関係　▲環境　◆言葉　■表現

★砂の心地よい感触を味わう。

●安定した保育者との関係を通し友達との関わりをもつ。

▲カップに砂を入れたりこぼしたりして楽しむ。

★固まったり崩れたりする砂の感触を楽しむ。

■見立てやつもり遊びを楽しむ。

◆保育者と言葉のやり取りを繰り返し楽しむ。

☞ 保育者の関わりのポイント

☆ **保育者は、子どもが興味関心をもって主体的に遊ぶ姿を大切にし、場面に合わせて遊びを意味付けたり価値付けたりする援助を心がける。**

- 安心できる保育者や友達と一緒の場で遊ぶことが楽しくてたまらない２歳児のＭちゃん。砂の心地よい感触を味わいながら友達がいる砂場でままごと遊びを始めた。
- 安定できる砂場でのやりなれた遊びの中でＭちゃんのイメージは豊かに広がっている。
- 保育者がＭちゃんのしていることを丁寧に受け止め、イメージに合った言葉をかけたことで、言葉のやり取りが始まった。「どうぞ」「おいしいね」「ごちそうさま」などの言葉が、具体的な行為とともに発せられた。
- 保育者が近くにいたＮちゃんの思いを汲み取りＭちゃんに伝えたことがＭちゃんとＮちゃんが関わるきっかけとなり「どうぞ」「これあげる」などの簡単な言葉のやり取りが始まった。このような経験を通してイメージを伴った言葉が獲得されていく。
- 友達と関わって遊ぶ中で、ものを取り合うなど自分の思い通りにならない経験もしながら少しずつ他者の気持ちに気付いていく。
- 砂の性質や感触、砂場の道具の使い方など２歳児なりに考えたり試行錯誤したりしながら取り組む姿も見られるようになる。保育者は、自ら環境に働きかけ主体的に遊ぶ子どもの姿を大切にしていく。

5　実践事例（12）

２歳１１か月の頃

楽しいね　あぶくたった!!

保育者や友達と一緒に遊ぶ楽しさ

保育者と子どもたちとで「あぶくたった」をして遊んだ次の日に、Ｏちゃんが「あぶくたったしよう」とＰちゃんに声をかける。Ｑちゃんが「いいよ。Ｒちゃんもやる？」とＲちゃんを誘い子どもたちだけで遊びが始まる。台詞もよく覚えていて「トントントン何の音」「風の音」とやり取りをして楽しそうであったが、鬼の子どもに追いかけられてそのまま逃げ回っているうちに遊びが終わりそうになる。そこで保育者が「いれて」と言うとあぶくたったを続けたいＯちゃんは待ってましたとばかりに「いいよ」とうれしそうに言い、他の子どもたちも加わり遊びが楽しく続いた。

★健康　●人間関係　▲環境　◆言葉　■表現

★保育者と一緒に楽しんだ鬼遊びをまたやりたいと思い実現する。

◆遊びの中で歌や言葉のやりとりを楽しむ。

●友達と一緒に動いたり言葉を言ったりする楽しさを感じる。

●保育者と一緒に遊ぶ楽しさを感じる。

●保育者に思いを汲み取ってもらうことのうれしさを感じる。

●友達に思いが伝わる喜びを感じる。

■みんなと声を揃えて歌ったりリズミカルに表現したりすることが楽しい

★保育者や友達と遊ぶ中で身体を動かす楽しさを感じる。

☞ 保育者の関わりのポイント

☆ **保育者は意図や計画性をもって教材を選択することが大切である。自分たちで遊びたいという子どもの思いを受け止めながらも、遊びが継続していくようタイミングよく援助する。**

- 自分たちで「あぶくたった」を始めたＯちゃんたち。戸外で風の心地よさや開放感を感じながら、昨日、保育者と一緒にクラスのみんなで遊んだ「あぶくたった」の鬼遊びが、楽しい遊びとして子どもたちの心に残っていたことがうかがえる。
- 遊びのルールが簡単であると共に、歌を歌いながらの動作は日常誰でも経験していることから、子どもたちだけで遊びを進めやすかったようである。保育者や友達と一緒に遊ぶ中で自分なりの動きができる「あぶくたった」の教材性のよさである。
- 自分たちで遊びを始めたものの、遊び方があいまいになってしまったころ、保育者がタイミングよく遊びに加わったことで言葉のやり取りの楽しさや追いかける、逃げるという鬼遊びの楽しさを取り戻すことができた。
- 友達や保育者と声を揃えて歌ったり、手をつないだりすることが気持ちのつながりになっている。

６　必要な経験に向けての工夫及び教材・玩具など

伸び伸びと体を動かして遊びを楽しめるように

○　水や砂、どろんこで遊ぶことを喜び、保育者と一緒に楽しむ。
○　タイヤを使ったり、段差を登り降りしたり、手足を伸び伸びと動かして遊ぶ。

・バケツ　・ざる
・カップ　・シャベル
・おたま　・スポンジ
・タイヤ　・巧技台
・なべ　・ペットボトル
・フープ　・ジョウロ
・ままごとの茶碗　など

見立てやつもり遊びを楽しめるように

○　大人の真似をしたり、気の合う友達と言葉をやり取りしたりしながら、自分の好きな役になってつもり遊びやままごと遊びを楽しむ。

・バッグ　・椀
・風呂敷　・皿
・バンダナ　・なべ
・スプーン　・布団
・チェーン　・お手玉
・エプロン　・人形用のベッド
・キッチンセット
・食べ物に見立てられる物　など

歌やリズム、言葉の遊びを楽しめるように

○　保育者に歌ってもらったり、音楽を聞かせてもらったりすることを喜び、全身で表現することを楽しむ。
○　手遊びやわらべうた遊びなど、保育者との関わりを楽しみながら喜んで行う。
○　絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣したりして遊ぶ。

・手遊び　歌遊び
「にぎってひらいて」
「げんこつやまのたぬきさん」
「なべなべそこぬけ」
「あがりめさがりめ」
「あぶくたった」
「おせんべやけたかな」　など

・絵本
「おおきなかぶ」　「しろくまちゃんのほっとけーき」
「はけたよはけたよ」　「みんなうんち」
「そら はだかんぼ」　「ごろごろにゃーん」
「コッケモーモー！」　「でんしゃ」　など